

とあなり

第 9 号

平成 5 年 12 月 31 日

発行所

登渡神社社務所内

登渡会編集室

電話 043(242)3403



平成5年例祭 みこし担ぎ上げ

西千葉
総鎮守

登渡神社略記

鎮座地 千葉市中央区登戸三三三八

神社名 登渡神社(通称登戸神社)

御祭神 天御中主神 高皇産靈神

神皇産靈神 天日鷲神

御神徳 天御中主神 高皇産靈神

神皇産靈神の三柱の神様は造化三神と称えられ宇宙の初めの時お生まれになられこの世の中のあらゆるものを初めてお造りになられたという御偉業から、災いを除き、人を苦しみから救い、あらゆるものを生み育て、お守りして下さる靈験あらたかな神様であらせらる。

御由緒 当神社は正保元年(一六四四)九月五日、千葉家の遺族、

登戸権介平定胤が祖先を供養する

ため千葉妙見寺(現在の千葉神社)

の末寺として妙見大菩薩を奉斎し、僧定弁に守護させたのがそのはじめと伝えられ、その後、慶応三年

(一八六七)に登渡神社と改め御祭神を天御中主神以下の造化三神

に定め、明治四十一年に登戸字鷲塚鎮座、鷲神社を合祀し、現在

は四柱の神様がまつられております。

御社殿 本殿は総檺造り、銅板瓦葺屋根、奥行四間、間口四間の伽藍構造で嘉永三年(一八五〇)六月、信徒の浄財五百両をもって、

葛飾郡八木村の棟梁紋次郎の施工により完成、また諸彫刻は、信州上諏訪の立川内匠正の作になるものでその精巧壮麗さの故に、昭和四十三年千葉市文化財に指定さる。

平成二年(一九九〇)の大造営で本殿を現在の場所へ移築し、新たに鎌倉時代の建築様式に準じ、桧造り、間口六間、奥行三間の入母屋造銅板一文字葺の拝殿。前面を間口二間の流れ向拝とし、後方に間口五間、奥行二間半の切妻屋根の幣殿、神饌所、祭器庫を設け、幣殿は正面に高欄を廻し、床を桧板張り、天井は格天井鏡板張仕上げとした。

また、神興庫、大師堂、古札納所新築、その他末社の修理、境内地の整備、植樹等の大事業が、今上陛下御大典という我国歴史上の佳年に成されたことは御神慮は勿論のこと、敬神の念篤き氏子崇敬者の皆様方の御尽力の賜物であると存じます。

伊勢神宮式年遷宮



臨時出仕として御奉仕
登渡神社宮司 星次百太郎

第六十一回式年遷宮の豊受大神宮（外宮）の臨時出仕の栄を賜り十月三日伊勢へと出向し、六日迄御奉仕申し上げました。

四日午後四時、川原大祓の儀、それより先に潔斎（浴室で身を清める）祭儀中の心得及び作法の説明を受け、私共臨時出仕は白雑色赤単、平礼烏帽子、白くくり袴、白靴を履き、川原祓所の所定の位置に付き、祭主以下奉仕神職の参進を待つ、四時、川原祓の儀、奉仕者全員（百数十人）と神宝辛櫃等二十三合が祓を受け、臨時出仕祓所より辛櫃を昇ぎ参進（神宝の重さが肩に食い入る）御正宮の所定の位置に据え速やかに北御門（裏門）より退出。

翌五日、いよいよ遷御の儀、午後一時外宮神楽殿に参集、潔斎の後、説明を受け、三時着装、四時弁備（正宮内院及び中重に鋪設—畳表—を敷く係り）五時半奉仕位置（御垣内西宝殿側）に付く。六時勅使以下齋館正門より参進、第

二鳥居において勅使の修祓の儀が行なわれ、その後、勅使以下禰宜迄がそれぞれ太玉串を両手に執つて正宮御垣内に参入し、中重の石壺に着座、太玉串の奉納が行なわれる。終りて勅使以下及び祭主、大宮司、小宮司以下中重の版を起ち内院に参入し、勅使御祭文を奏せられる。その後、大宮司、小宮司によつて御正殿の御扉が開かれ、祭主以下殿内に候し、次第によつて渡御の列次が整えられます。御準備全く整い、所役の宮掌が瑞垣御門にて鶏鳴三声カケロー、カケロー、カケロー（皇大神宮にてはカケコー、カケコー、カケコー）を奉仕し正八時、勅使神前に進み謹みて出御あらせられ、絹垣の内に入らせられて御道敷の白布の上を新殿へとお渡りになられる。

御列が進ませられるにしたがつて庭燎はすべて打ち消され、淨闇の中、楽長、楽師によつて道楽が奏せられ、前陣、後陣の列が続きます。神儀静々と新殿に入御あらせられ、御装束神宝が殿内に奉納せられ、大宮司、小宮司御扉を閉じ奉ります。勅使、版に進みて御祭

文を奏せられます。諸員中重に退き、奉拝八度拍手両端（八度拝）の拝礼を行なつて御垣内を退出いたします。その後、外宮の別宮、多賀宮を遙拝の上齋館に退下、遷御の儀が全て終了したのが午後十時、無事に奉仕を終え装束を脱いだ時、心地よい安堵感と満足感が走った。

御遷宮は御社殿のみならず神様に捧げる御神宝や御装束も全て最初の原型そのままに、二十年ごとに新たに作り替え型を復元する。

その型を守ることに対しては、極めて厳格なものである。それは単に技術の継承ということではない。型を厳格に守り、全てを新しく作り替えることにより、その型に込められた祖先の心に思いを致し、日本建国の理想がよみがえるのである。時代の大きな転換期を迎えた今日、この御遷宮を通じて、新しい日本が開かれることを私達は願いたいものである。

伊勢で三十年振りに再会した友がいた。学生時代の思い出話に花が咲く、来年は同期会を必ずやるとの確約を取り帰路につく。

平成六年伊勢神宮参拝予定
平成六年二月十一日～十三日



平成五年度親睦旅行（白子温泉）



雑観／



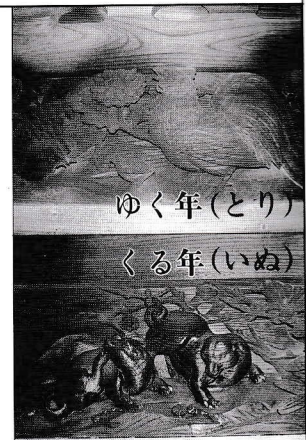
登渡神社氏子会
本部長 金子 武

紅葉の便りがあちこちからささやかれる今日此の頃でございます。秋は何となく郷愁を誘うかの様に、私達に何かを語りかけて来る季節ではありますが、反面又実りの秋でもあり一年の収穫の喜びを存分に味わえるのも、又事実であります。然し本年許りは戦後最大の大凶作に見舞われまして、一部の米作農家にとっては、飯米は愚か、種粳の確保すらおぼつかない状態にあるやに聞いております。何しろ七、八、九月の一番大切な日照時に、東北地方の北部では、長雨による冷温に加えて、太平洋岸から吹き寄せる偏東風の影響で冷害のダブルパンチで、稲にとって一番大敵のいもち病はもとより、結実のない黒穂病、踏んだり、けつたりの態たらくでした。

現在の日本の力からして、我々国民がアフリカ等の飢餓に比べたら雲泥の差があり、平静を保っておられるのも、一に政治の安定がもたらせてくれる恩恵にほかなり

ません。何と吾々は良き時代に巡り合わせたのものと感謝せねばなりません。世界各国で日本程、物資にめぐまれ、全世界の商品、産物がいつでも入手できる国は他に例をみないのであります。余りにも恵れすぎた環境の中ですので災害は忘れた頃にやってくると云われますが、何か異変が起きなければ良いかなと危惧の念に駆られます。小生もギャンブルを人生の快楽の友として日々を過しておりますが、全く右を見ても左をみてもギャンブル花盛りの感が致します。競馬競輪は申すに及ばずボート、オート等々の施設も最近ではデラックス化の一途を辿り、特観席料五千円等も珍しくなく、メッセンジャーガールがいて投票券を居乍らにして求められるなど実に優雅極りなく、嘗ての元禄時代の再現の感が致します。尤もこれらに群り興ずる人達は全国民のほんの一握りに過ぎません。

さて、取止めのなきま、に紙面を汚して参りましたが、終りに氏子諸氏の御健勝と御多幸を切に御祈り申し上げて筆を置きます。



登渡会



登渡会代表
齊 藤 幸 男

北海道南西沖地震のショックがさめやらぬうちに、台風の影響もあり、連日のように雨が降り続き、各地で大きな被害が続出。近くでも、コンクリートジャングルによる都市型洪水、土砂くずれもありました。十月に八日間雨の降らない日が続いたら、今年、今までの最長記録だそうです。

台風接近か！と気をもむ日々のなか、前日に引き続き朝からの晴天、本年例祭の二日目を迎えました。五時前におはやしの皆様が勢揃い。参拝の後、役員の皆様と境内の清掃、朝ばやしの太鼓を叩き一曲ながら笛も吹かせて頂き気分上々。三門さんより、赤飯の差し入れをごちそうになりながらスケ

ジュールの確認、車への飾り付けも済み時間通りの発御となりました。今年は、みこし大修理に出すという事が知れ渡ってか、沿道にも大勢詰めかけ賑わい、西千葉での担ぎ上げも盛大に、そのまま各接待所での休憩だけで、途中休む事なく、今年始めての長い道程を、吉井君の笛の合図とともに、時間どりの通過。人波と威勢の良い掛け声が町中に響き、大きな「和」となり、かつて無い盛大な祭りであったと思います。各接待所の会長さんをはじめ役員有志の皆様の十分な接待に感謝申し上げます。

登渡青年会として、長年に亘り愛され御指導頂いて参りましたが、尚、一層の会発展を願ひまして「登渡会」と名称を変え、睦会と一つになり手を取り合い堅い結束と努力の基進んでまいりたいと思います。地域の皆様方の深いご理解とご指導を、今迄以上賜ります様宜しくお願い申し上げますとともに、会員の皆様には、助勢の方法はいろいろあると思いますが、大きな心を持って一層会発展のためご助力頂ければと思います。

登渡神社との出会い

登戸・新千葉三丁目

登渡氏子会支部長

高野 良男



小学校二年のとき、父の転勤で銚子から千葉に転居することになった。登戸小学校へ転校の手続きを済ませた帰途「これから登戸の住人になるのだから、氏神様にお参りして行こう」と言う母と大鳥居の前に立ったのが、登渡神社を訪れた最初のことである。

どつしりとした大鳥居から続く深緑に覆われた石畳の参道、石段を登った高台に鬱蒼と繁る樹々、その梢の間から古めかしい社殿を望む光景は、調和のある一幅の絵画の如く子供心にもその荘厳なたずまいに崇敬の念にかられ、思わず最敬礼をしたのを今でもはっきりと記憶している。

母と本殿の前に進むと、左手に穏やかな海の眺望が開け潮の香がそこはかとなく感じられた。それまで銚子の荒海に馴染んでいた目には「本当に海なのかな、あの犬吠埼の海と続いているのかな」と信じ難い思いで眺めたものである。

春の陽光を受け、さざ波が煌く海面も忘れられないシーンであった。その後、水平線に沈む真紅の夕日と落日を浴び金色に輝く海、冬の朝雪をいただいた富士山を望遠する光景を知り、四季おりおりのバラエティーに富む境内に足の向くことが多くなったのも自然の成り行きであった。

神社の前を通る時必ず立ち止まって頭を下げるのが常である。昔気質の母がそうするのを見ていていつしか習慣性となったものであろう。特に信仰心が厚いわけでもないし、宗教的哲理に支えられての行動でもない。単純に自らの生きざまに神様の加護が与えられるようにと念ずるだけのことである。しかし、そのことによって自ら努力すれば何事も成就する可能性があるという自信が湧いてくるから妙である。たとえ失敗しても「神様の加護があったからこれだけのマイナスで済んだのだ」という安堵感があり、もう一度チャレンジしようとする意欲の源泉ともなっている。

車が間断なく行き交う交通戦争

の世相にそぐわないのか近時そのような姿を余り見受けなくなつたが、時折り神社前で遙拝をして通り過ぎる人―それも年配者が多いようである―を見掛けると何となく心がなごみ、声をかけたくなるような親しみの気持におそわれるのである。ただ、幼い子供達が拝礼して通る姿を見ることは滅多になくなった。誠に残念に思うのだがそう思うのも年のせいかも知れない。

政令指定都市の仲間入りをした千葉市は日々大きく変貌しつつある。いつの間にか葛飾北斎の描いた浮世絵「富嶽三十六景」に名を残した登戸の海も、磯の香りとともに消えてしまった。新しい活気のある街造りのなかで、子供の頃の想い出を偲ぶようすが消されていくのも時の流れで、致し方のないことであろうが何とも淋しい限りである。

本殿の改修、拝殿の新築と神域が整備されることは大変喜ばしいことであるが、私は今でも往時と変わらぬたたずまいを残している表参道の大鳥居から境内を見通し

た眺めが一番好きであり、何時までも変わらないで欲しいと願うものである。

皇太子殿下御成婚記念

幟旗奉納

当神社氏子、又、登戸お囃子連の一員として正月・節分祭・例祭等の祭事に永く御奉仕されている登戸一丁目にてクリーニング店を経営する藤井七三郎氏は、予てより例祭の折りに拝殿前に建てられるのぼりのことにつき考えをお持ちで、此度、皇太子殿下御成婚の嘉き年に当たり、時を得て、「鎮守御祭禮」の幟旗を奉納されました。日本人が失いつつあるすばらしい伝統や神社を中心にしたまとまりなどの大切なことを子供や孫、地域の人々に伝えるべく藤井七三郎氏は日々精進なされております。その道の先達として益々の御活躍を御祈念申し上げます。日々好日





初めて氏子役員になって

登戸、四、五丁目
登渡氏子会支部長

鈴木 富治

平成四年四月より、西登戸自治会の会長を仰せつかり、町内の慣習により、登渡神社の氏子役員の仲間に入れていただくことになりました。

その時以来、各月々の祭礼行事新年の祭礼、そして本年九月に行われた登渡神社の例祭と、私にとっては皆初めての体験であり、戸惑うことも多くありましたが、それと同時に深く感動した面も多々ありました。

長い歴史と伝統に支えられ、揺るぎないたたずまいの登渡神社の厳かな神殿！

温和で誠実な、金子本部長を中心として、奉仕の精神に徹した登渡青年会（登渡会）の皆さんの前向きな協力体制！

さらに神社をこよなく愛する役員の皆様のご活躍！

私はその素晴らしさに目を見張り、深く感銘いたしました。ただそれとなく役員になった私

でしたが、いろいろな行事に参加していくにつれ、氏子会の役員になった喜びが心の底から湧き出てきたのが不思議です。

いみじくも、来年、「登渡神社御鎮座三五〇年」を迎えると言う時に、役員の一員として仲間入りさせていただいたことは、神のお導きではなかったかと、襟を正し深く感謝しているところです。

私どもの町会では、今まで、神社の諸々の行事などについての紹介や報告が役員内にとどまり、広く町民に知らせる活動が少なかつたように思いますので、これから、常に理事会などを通じて、良く知らせ、進んで諸行事などに参加するよう仕向けていきたいと願っています。

西登戸自治会では、当初にも述べたように、会長が登渡神社の氏子会支部長を兼ねることになっていますが、私は会長を辞し支部長を辞しても、登渡神社氏子会役員として終生お手伝いさせていただきます！と決意いたしております。

登渡神社を取り巻く諸々の出来事が安らけますように！



登渡「祭り」考 VII

登渡会会員 西 郡 饒

平成五年の登渡神社例祭は本祭であった。恒例の神輿渡御も、今年には順路を変え、何十年振りかで汐見ヶ丘、新千葉でも担ぎ上げによる渡御となった。例年行われていた車上での渡御とは異なり、祭の雰囲気はいやが上にも盛り上ったものと思う。現在の様な車優先で複雑化した世の中では、交通規制の面を含め色々な問題があり、担ぎ上げによる神輿の渡御を行う事はなかなか難しいと言われる。しかし、それでも神輿の渡御は担ぎ上げによるものであつて欲しいと思うのは小生ばかりではないだろうと思う。

日本各地には様々な祭がある。その名前を言うだけで「どこそこの祭」とわかるものや、いわゆる珍らしい祭も少なくなく、地元でのそれらの祭に対する熱の入れ方は大変なものがある。その意味では登渡神社の祭は極めて平均的な日本の祭と言えるかも知れない。その登渡神社も平成六年には創建三百五十年を迎えようとしている。

る。一口に三百五十年と言うが大変な歳月である。今、その記念事業として神輿の大改修をはじめ、様々な事業が計画され、実行に移されている。自分達の町にもこんな立派な神社が、こんな立派な神輿があつたのだという事を改めて認識してみることが必要ではないだろうか。

極めて平均的な祭と言ったが、三百五十年にわたって連綿と続いて来ている事を考えた時、それは単なる一神社の宗教的行事を越えた我々の地域の文化であるという事は前に述べた。日本人が日本人としてのアイデンティティーを失いつつある様に見える状況の中では、我々は逆に、この文化を守り、伝える事は勿論、地域連帯の再生の為に、もっとこの祭に関心を持って参加するべきではないだろうか。ともすると神輿を担ぐ事だけに目を奪われがちであるが、祭というものの本質を考えるだけでなく、我々の地域の「誇り」という意味でも、平均的な祭を越えた本当の地域の祭を再生したいと心から望んでいる。

迎春

登渡神社 登渡神社氏子会
登 渡

〈宮司が兼務する神社紹介〉

星次宮司が登渡神社の外に兼務し、奉務しておられる神社が八社ございます。すでに本会報第8号にて四社御紹介致しました。

今回は、殿台町正八幡大神、萩台町白幡大神、園生町園生神社、小中台町熊野神社をそれぞれ掲載致します。

⑤ 正八幡大神

鎮座地 若葉区殿台町二九九番地
御祭神 誉田別命 宇賀魂命
息長帯比咩命 菅原道真
境内地 百三十三坪
社殿 本殿 流造 間口一間半
拝殿 流造 間口三間

御祭儀 四月二十二日 春季例祭
九月十五日 例祭
十一月二十七日 秋季例祭
奥行三間



⑥ 白幡大神

鎮座地 稲毛区萩台町一二八番地
御祭神 誉田別命 天御中主命
武御名方命
境内地 百五十二坪
社殿 本殿 流造 間口二間
拝殿 切妻造 間口二間
御祭儀 一月二十日 奉謝祭
九月十九日 例祭

⑦ 園生神社

鎮座地 稲毛区園生町六二四番地
御祭神 天御中主命 国常立命
国狭槌命 豊斟淳命
湍土煮命 沙土煮命
大戸之道命 大若邊命
面足命 惶根命
伊弉諾命 伊弉册命
大山祇命



境内地 七百七十四坪
社殿 本殿 流造 間口一間
拝殿 流造 間口二間半
奥行一間

御祭儀 九月二十二日 例祭

⑧ 熊野神社

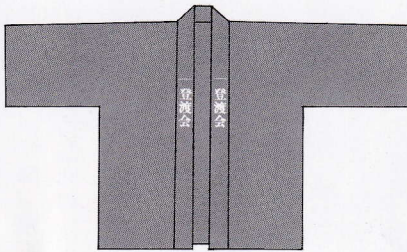
鎮座地 稲毛区小中台町一番地
御祭神 素盞鳴命 速玉男命
伊邪那美命 事解男命
保食神 猿田彦命
菅原道真公
境内地 百四十坪
社殿 本殿 神明造 間口二間
拝殿 切妻造 間口四間
御祭儀 一月二十日 奉謝祭
九月二十九日 例祭



登渡会活動報告

																								五 平 成 ・	四 平 成 ・
		9 ・																2 ・						1 ・	12 ・
6	5	4		29	21	7	15	20	5	30	15	3	18	7~6	3	1	15	10	3	~	1	31			
夕御饗祭	例祭・神輿渡御	夕御饗祭		本殿、末社、神輿庫 境内の清掃、立て看 板作り、取り付け	例祭会合	第49回定例会	浅間社例祭	例祭会合	第48回定例会	例祭会合	春季例祭、例祭会合	第47回定例会	初午祭	白子温泉へ一泊旅行	第46回定例会を兼ね	節分祭	水神奉謝祭	奉謝祭	後片付け	参拝者数一八、三七八名	初詣の接待	歳旦祭、	大祓式、除夜祭		

登渡会半天



登渡神社祭半天の注文をお受けします。
(頒布価格 ¥10,000)社務所にて受付

26	12	12	4	23	11	10	12	6
会報の会合	第51回定例会、会報	秋季例祭	会報の会合	会報の会合	第50回定例会	例祭直会	奉告祭	期間中早朝清掃
末社、境内の清掃、	迎春の諸準備。本殿、	仮設授与所設営等						



小池	小高	小川	大場	植草	稲田	石原	石橋	石出	青木	阿部	小川	渡辺	古川	西郡	須田	鉄炮塚	三門	齊藤	西澤
良三	政義	恒義	敏男	毅	四郎	一彦	毅	尊由	俊幸	和夫	直樹	統道	増雄	饒	茂夫	正一	康浩	幸男	英男
(アイウエオ順)	吉井	森川	持田	原	浜田	浜田	野澤	西郡	西郡	中島	中村	田中	滝口	高橋	高橋	染谷	外山	穴倉	桜木
	広育	岩視	誠	俊夫	長平	素直	芳男	達男	久雄	仁吉	正夫	速男	信孝	秀行	金吉	一男	秀夫	健夫	一郎

登渡会会員名簿

御神水井奉納

石出一三・石出文四郎両氏は今は亡き御尊父様(石出大明氏)が起こした(榊山一組よりそれぞれ独立し、一三氏は中野町で(榊大明建設、文四郎氏は加曾利町で豊蔵建設(株)を設立し今日に至っております。当神社に井戸が無いことを知った両氏は、自分達が生まれ育ち現在があるのも登渡神社のおかげ、又、皇太子殿下が御成婚なされた目出度い年ということも重なり、兄弟話し合い、心を合わせて御神水井の奉納となった。

この御神水。含み飲む、何とも云いがたい美味、正にありがたさに涙こぼれるの心境。多謝多謝



平成5年9月竣工

家庭のまつり

お神札をいただいたら神棚にお祀りします。神棚はその家の中で神様がお住みになるところですから、明るく清らかな高いところが良いでしょう。神棚の向きは南向きか東向きが良いとされています。なお神棚がない家庭の場合には、簡易神棚も用意されています。条件により、とりあえずお神札を柱などの高いところにお貼りするのも、大切にする心があれば無礼にはなりません。

神棚のまつり方

正式な神棚はまず鴨居などを利用して棚をつくります。棚の中央に宮形（神殿）をすえ、扉の正面に鏡を、左右に櫛や灯明を立てます。注連縄は太い方を向って右、細い方を左にして掛け、紙垂をつけます。

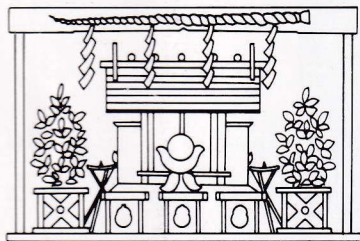
お神札の順位

お神札を横に並べておまつりするときは、中央に伊勢の神宮のお神札（天照皇大神宮）向って右に氏神様（登渡神社）のお神札、左

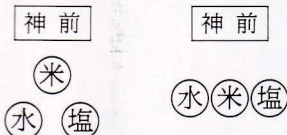
にその他のお神札の順に並べます。一つに重ねておまつりするときは一番表にお伊勢様、（天照皇大神宮）次に氏神様、信仰神社の順にするのが良いでしょう。

お供え

神棚には毎日朝、お供え物（神饌）をお供えします。神饌は米・塩・水で、米は洗米かご飯、お初水は毎朝の初水をお供えします。また珍しい物や四季の初ものなどを得たときには、そのつどお供えし、その後、家族で頂戴します。



神棚のまつり方



お参りのしかた

お供えが終わったら、朝の拝礼をします。拝礼の作法は神社にお参りするときと同じく、二礼二拍手一礼です。とくにお誕生日など

のお祝いときは、本人を中心にして家族一緒に拝礼するのがよいでしょう。

古いお神札の納め方

一年間、お守りいただいた古い神札は、粗末にならぬよう神社に納めます。旅行先などで戴いたお神札なども一緒に納めて戴いてください。



昭和二十三年例祭光景



交通安全標語

交通安全は

家庭と地域の

願いです

会員募集

この会は登渡神社の御神徳に感謝し、諸行事を助勢すると共に、会員相互の親睦を図り、御神徳を宣揚することを目的とする。

以上の主旨に賛同の方、男女を問わず入会を御待ちしています。詳しいことは知り合いの会員もしくは登渡神社社務所まで御気軽に御問合せ下さい。

電話 〇四三一二四二一三四〇三

編集後記

御忙しい中、貴重な御意見を御寄せ頂き誠に有難うございます。平成五年より会の更なる発展を願ひ登渡青年会から登渡会に改称となりましたが、今後共多くの御意見を頂ければ幸いです。神社や祭の古い写真や登戸の昔話などありましたら是非御知らせ下さい。